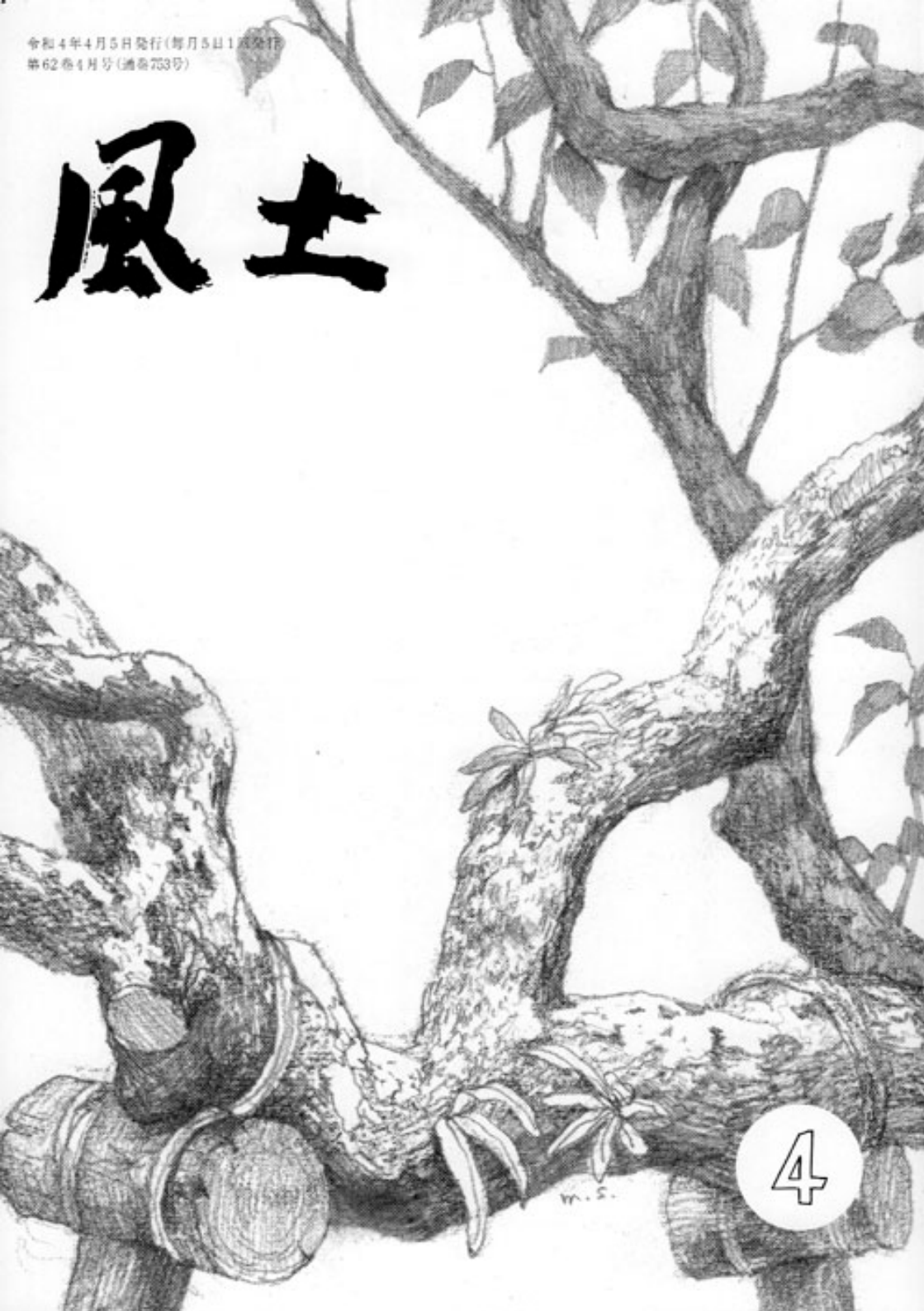


令和4年4月5日発行(毎月5日1回発行)  
第62巻4月号(通巻733号)

# 風土



4

## 石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

### 新宿に會ふは別るる西鶴忌

(句集『竹取』より昭和三十五年作)  
桂郎師にとつての新宿は、新宿西口ばん焼酒場「ボルガ」を意味します。桂郎師が「ボルガ」にいない日はないほど通っていました。「ボルガ」は、俳人や文人、芸術家のたまり場でした。友と語り、または恋につながる出会いと別れの「ボルガ」でした。好色ものを得意とした西鶴の忌日が華やぎを添えています。「會つて」ではなく、「會ふは」と強調したところに、桂郎師の「ボルガ」への思い入れが伝わります。

### 文彌人形一荷の届く爐のほとり

(句集『竹取』より昭和三十四年作)  
この句は、佐渡吟行で作ったものです。「文彌人形」は、佐渡に仏わる人形芝居で、「文彌節」という独特の節回しにより芝居をします。友人の計らいでそれを寺で観る機会を得たのです。人形芝居道具と演者が着いたところを詠んでいます。これを含め四十三句を「俳句」六月号に「佐渡行」として発表し、第一回の併人協会賞を受賞しています。俳壇が風土性俳句に傾いていく中で、桂郎師も境涯俳句とは違うものを求めていったのです。

## 神蔵器俳句鑑賞

南 うみを

### 凍星を源流にして大河かな

(句集『月虹』より平成二十一年作)  
この『月虹』は器師八十二歳から八十五歳までの句を収めたものです。吟行も極端に減り、過去の経験を引き出しながらの句作りも増えてきました。想像力を駆使しますので、その分発想が自由に羽ばたきます。この句も、滔滔と流れる大河の源流の始めは、凍星の一滴からだど発想しています。現実離れしているようですが、黄河とか揚子江などの源流は数千メートル級の山脈です。その嶺の上に輝く凍星を想像すれば、この句の雄大なロマンに頷けます。

### 宙を飛ぶ店の自転車雲の峰

(句集『月虹』より平成二十一年作)  
「宙を飛ぶ店の自転車」は、自転車屋の壁に掛かっている自転車のことです。そこへ「雲の峰」を取り合わせると、この自転車は、「雲の峰」へ向けて大空を飛んでいくように想像できるのです。この頃になると器師は事実上拘泥することなく、自由に発想し、軽々と句の世界で遊ぶようになっていきます。「命二つ」の理念を超えて、器師なりの「軽み」の世界に入ったのではないかと思うような句です。

# 父の斧

南うみを

宮津・知恩院戎祭 三句

大福笹立てて商ふ智恵の餅  
香煙をくぐりあがなふ戎笹  
戎笹はみ出す壺億円の札  
寒禽の声ぴしぴしと父の斧  
薪割りの父へ柄杓の寒の水  
瀬の石にひつかかりつつ葱の屑  
酢なまこの齒応へ古希にあやふやな  
闇ふるはせて雪折れの竹の音  
神に水ほとけにお茶や雪ごもり  
水仙や阿修羅は永久に佇ちつづけ  
久女忌のひたすら風の寒桜  
けふも雨いよいよ雪のすきとほり



# 竹間集

同人作品



雪催ひ

林 いづみ

数へ日や『父の夜食』と時刻む  
一灯に揃ひて閑か去年今年  
室咲きの今し気高し胡蝶蘭  
まゆ玉や老舗湯宿の長廊下  
指先のよるこぶ足袋を先づは脱ぐ  
着ぶくれて行住坐臥にあるさはり  
橋脚は明治遺構や雪催ひ

日脚伸ぶ

土井 三乙

初刷を卓に眼鏡を掛け直す  
初電話雪雪雪のふる里へ  
冴ゆる夜の全天空に月一つ  
彼方なるふるさとは今雪の底  
村の子に夜を遊べる小正月  
大寒の漢にありて泣黒子  
水の辺に息づくものよ日脚伸ぶ

立春大吉

小林 共代

山門に立春大古織りの町  
玻璃戸まで春一番のこゑとどき  
餅花を煎つて食べしもその昔  
子等の声とどきし山々笑ひけり  
春疾風声をのこして鳥の翔つ  
春潮に夕日あつめし舟溜  
頼朝のかくれし岩や春の闇

雪の辻

中根 美保

行き当たる古き祠や雪の辻  
競輪場行きバス誰も着膨れて  
反るままの紙見本帖去年今年  
初笑達磨落としが飛びすぎて  
大楯に柴をふはりと被せにけり  
岩肌に触るる端より滝凍つる  
蜂蜜の光を罎に寒見舞

福寿草

内藤 静

読み継ぐは半藤一利去年今年  
楡いつぽん初日に影を正しけり  
双葉よりかく逞しき福寿草  
待つことのすなはち祈り福寿草  
コーヒーとケーキのセット女正月  
浮みては言葉逃げ行く霜夜かな  
霜の夜の足音を待つ犬の耳

今朝の雪

間島あきら

ロープウエーに見下ろす港冬かもめ  
葱買うて包み切れざる車中の香  
初鶏鳴一羽に続く二羽三羽  
八重の雲割つて初日のあらはるる  
海は藍一月二日の霧笛橋  
初電車女性専用車とありぬ  
野を山を太初に還す今朝の雪

大根炊く

土井ゆう子

幾年もこの日の出椀雑煮盛る  
娘一家に玄関狭し福寿草  
八甲田山姿正しく寒に入る  
さりげなく早起きしたる七日粥  
俎板をよるこばせたる齋粥  
寒波来る早う来たりて早う去れ  
大根炊く心の隙間埋まりゆく

チエロの音

森高 武

野も谷地も枯れて野鳥の声の中  
不揃ひな石畳なり冬の雨  
温室にブーゲンビレア溢れさう  
向日葵を部屋に咲かせて日脚伸ぶ  
逸早く咲く寒梅の古木かな  
荒波に突つ込んで行くしのり鴨  
寒の海チエロの音高く低く鳴り

女正月

池田 光子

黒潮に上がる緞帳初日の出  
二日はや風をまとひし竹箒  
出初式真つ青な空したたらす  
獅子頭泣き叫ぶ子になほ寄り来  
初戎のし飴今も縞模様  
露天湯に星座をなぞる女正月  
葉牡丹の渦にもみあふ日差しかな

筆供養

落合 絹代

神鈴を振れば左右の梅薫る  
初天神煙たなびく筆供養  
立春と書くも添はざるペンの先  
立春大吉寅年の娘は還暦に  
立ち漕ぎのペダル坂ゆく春隣  
「生きたくば食をひかえよ」初暦  
振袖のブーツ二十歳の春の音

上九一色村

豎山 道助

沢庵に鼻寄せパリの税関吏  
モナリザにまた戻り来る冬帽子  
旅はじめバースカナルの闇深く  
ドロインの野越え山越え西行忌  
襦袢干す一碧楼忌の冬天に  
片手袋拾ひし医師のその後かな  
一月の上九一色村の黙

# 山河集

同人作品



## 南うみを選

大釜に汁粉の匂ひ寒稽古

松本 胡桃

つぶやきを猫に聞かせる霜夜かな  
どぶろくを甕より掬ふ牡丹鍋  
白猫と膝の冬陽を樂しめり  
うどん屋のつり銭温し冬の雨

おほいぬもこいぬも駆ける冬銀河

小原美美子

信玄餅一と折さげて寒見舞  
青菜洗ふ刃先のごとき寒の水  
ひとところ焼野のぬくみ踏んでゆく  
みづうみのささくれてゐる孕鹿

蒲鉾の端もいろどり七日粥

森田 節子

花道の幅に獅子舞足踏みす  
繭玉と役者の鬘の壁に揺れ

羽子板の菊五郎の目の艶気かな  
寄せ植系の白砂こぼるる福寿草

杉本薬王子

追儼終へにぎり頬張る彌宜と鬼  
節分や鬼の足てふ飴を食ぶ  
破芭蕉爆心地の如く枯るる  
墨を擦る指の疲れや春の雪  
輝きて木々より零れ初雀

谷田明日香

カツ丼の胃の腑に重し霰降る  
餅小さく切つて卒寿の母の口  
冬野行く漢の影の熊に似て  
残雪を踏むや噛みつくやうな音  
転院の決まりし夜や冴返る

## 風土独語／南 うみを



どぶろくを糞より掬ふ牡丹鍋 松本 胡桃

この句は「牡丹鍋」すなわち猪鍋を囲みながら、「どぶろく」を酌み交わす野趣味のある世界を提示している。また「糞より掬ふ」からは、この「どぶろく」が手造りであることが解る。「どぶろく」も「牡丹鍋」も季語だが、主季語は「牡丹鍋」で、「どぶろく」はその頃の「季物」として読むのが妥当だろう。

金閣に向き替へ浮寝鳥となる 森田 節子

「金閣」とは金閣寺のこと。その庭の池に水鳥がやってきた。ひとしきり、池を巡ったあと、「金閣」へついと向きを替え、羽根を休め、頭を背中に沈め、「浮寝鳥」になってしまった。華麗な「金閣」と「浮寝鳥」は、まるで一幅の絵のようだ。これも「金閣」と言う言葉の持つ力である。

みづうみのささくれてゐる孕鹿 小原美美子

この句は「みづうみ」と「孕鹿」との取り合わせで、それを「ささくれてゐる」で繋いでいる。「ささくれる」とは、物のさきが細かく裂けかわれることから、気持ちごとげとげしくなるの意がある。ここでは「みづうみ」が尖るように波立っている状態に使っ

ている。この状態を腹が大きく、みずばらしげな「孕鹿」に重ねているのである。

平飼ひの寒の卵のさくら色 平田紀美子

読んでリズムがよい。また「寒の卵」はかくあるべしと読み手を領かせる。「平飼ひ」なればこそ「さくら色」である。割ったら黄身がこんもりと盛り上がる「寒の卵」だ。

追儼終へにぎり頬張る禰宜と鬼 杉本葉王子

鬼やらいが終わった後の一駒である。豆の撒き役は「禰宜」、また豆に追われる「鬼」も神職の者だ。さっきまで観衆をわかせた敵味方どうしが、仲良くにぎり飯を頬張る。神社の者たちにとっては、当たり前なことだが、なんとなく可笑しみが漂う。

衾中の耳の働く霜夜かな 高橋まき子

「衾」は寝るとき、身体を覆う夜具のことで、「布団」とはニュアンスが違う。作者は「衾」にくるまって「霜夜」の闇の中にいる。そして耳だけが敏感に何かを探ろうとしているのに気づく。寒さのせいではない。闇夜の霜の声を聴くためなのだ。

残雪を踏むや囁みつくやうな音 谷田明日香

これも敏感な耳が捉えた音である。「残雪」は新雪と違い、解けた雪がまた凍ったりして硬い。作者は踏んだ音を「囁みつくやう」に感じた。大胆な比喩だが、音の鋭さを感じさせる。

## 風土集



## 南うみを選

名田庄に伝ふ「陰陽」雪ばんば 川崎 森田 節子

顔見世のはねてすするや鱧蕎麦

老幹にしみるばかり冬の雨

石路咲いて海見ゆる丘裕明忌

分別の膝のくづるる大噺

木枯らしを包みて来る君の文 町田 松本 胡桃

歯応へのなくてよろしきおでんかな

裸木の影くつきりと杣の家

意地悪の力加減や日向ぼこ

肘伸びるとこに電池や年用意

仏壇も神棚も無し年用意 千葉 平田紀美子

一陽来復柴田久子はもうぬない

たそがれは静かな色や年の暮

すぐ曇る眼鏡拭きつつ年惜しむ

風筋のくつきりと出て芒原 逗子 高橋まき子

水澄むやかはとの底に飯の粒

色変へぬ松もののふの衿侍あり

大阿蘇の風呼び込んで芒波

餅撒きの声の野太き秋祭

冬に入るぼんのくぼより湯冷めして 福生 雨宮 桂子

ちやんちやんこ着て陸番の魚漁長

追熟の洋梨にほふ開戦日

空よりも土に親しき寒雀

狐火や子育て飴の店滅び

炬語りの昭和の段に夜汽車あり 宇治 渡辺 やや

仕事場へ己が足跡朝の雪

雪寄せの漢の身体湯気上がる

カチューシャに馴鹿の角櫛遊び

保育士はトナカイの役雪遊び